

園の輪

そののわ No.186

学校法人 甲子園学院



モーリス・ユトリロ「モンマルトル」(甲子園学院美術資料館蔵)

CONTENTS

〈校祖71回忌 追悼式〉…………… 2	〈学校園だより〉…………… 4～9
追悼の辞	幼稚園 小学校 中・高校 短大 大学
甲子園学院理事長・学院長 久米 知子	
記念講演	〈学院トピックス〉…………… 10
大本山須磨寺 寺務長 小池 陽人	学院生の活躍
「同悲の心 ～人の心に寄り添う～」	

校祖七十一回忌追悼式

令和六年三月三日、午前十時から甲子園学院高等学校体育館において、制限なしで従前通り、校祖第七十一回忌・前学院長十回忌が厳肅に挙行されました。祭壇には、校祖先生と久米利男前学院長先生のご霊位とご尊影の前に十六基の供花、お供えが捧げられ、学院長が追悼の辞を述べました。その後、教職員並びに各学校の学院生代表、保護者、卒業生が献花し、追悼歌・学院歌を斉唱しました。

追悼の辞

桃の節句のきょう三月三日は校祖先生ご逝去の年から数えて七十一回目の祥月ご命日に当たります。学院はこの日を校祖先生並びに久米利男前学院長先生の遺徳を偲び、併せて学院関係物故者の御霊を祀る「追悼の日」と定め、学院の最も重要な行事として毎年厳肅に執り行つてまいりました。

さて今年も元旦早々から、能登半島地震の発生、翌二日には羽田空港での航空機衝突事故と大惨事が続く波乱の幕開けとなりました。改めてこの場をお借りして地震や事故で犠牲となられた方々にお悔やみを申し上げますと共に、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。併せて被災者に寄り添いながら献身的に救援活動が続けられている自治体や自衛隊、ボランティアの方々に対しまして深く感謝の意を表する次第です。

令和六年三月三日、午前十時から甲子園学院高等学校体育館において、制限なしで従前通り、校祖第七十一回忌・前学院長十回忌が厳肅に挙行されました。祭壇には、校祖先生と久米利男前学院長先生のご霊位とご尊影の前に十六基の供花、お供えが捧げられ、学院長が追悼の辞を述べました。その後、教職員並びに各学校の学院生代表、保護者、卒業生が献花し、追悼歌・学院歌を斉唱しました。

および教職員から集まった義援金を石川県に寄付いたしました。少しでも被災地の方々の生活支援に役立てられ一日も早い復旧、復興に繋がることを祈っております。

さて、世界に目を向けるとロシアのウクライナに対する侵略戦争は二年を経ても一向に終息の兆しが見えず、また中東ガザ地区の紛争も熾烈を極め憎しみの連鎖は留まるどころを知りません。中東情勢の悪化は、我が国にとつても極めて深刻な状況を生み出す危険性を孕んでいます。一方、今年も世界中で重要な選挙が行われ、最大の注目は十一月のアメリカ大統領選挙です。その結果は我が国にも大きなインパクトをもたらすことになるでしょう。久米利男前学院長先生は世界情勢に極めて強い関心をお持ちでしたが、それは世界の動きが学校経営にも少なからぬ影響を与えることを良くご存知だったからです。

今や激動の時代の真ただ中にありますが、だからこそ私たちは平穩無事に暮らせる幸せに感謝し

ながら一日一日を大切に送らなければなりません。しかし人間は弱いもので、日々の雑事に追われ、つまらない我欲や些末な感情に捉われ、易きに流される場面がどれほど多いことでしょうか。校祖先生はそうした人間の根源的な弱さを見抜かれた故に、校訓三綱領の筆頭に「黽勉努力」を掲げられたのです。

さて私は新年の互礼会で「正確な情報の共有」の重要性を申しました。能登半島地震でもウソの情報やSNS等で拡散されました。古くは百年前の関東大震災でも流言飛語が飛び交いました。また歴史的にも立場ある者の不用意な一言が重大な事態を招いた例は枚挙にいとまがありません。学院の運営においても不正確な情報は判断を狂わせる元凶になります。

私学を取り巻く環境は年々厳しさを増しており、少しでも経営判断を誤れば致命傷にもなりかねず、今ほど正確な情報共有が求められる時代はありません。そのためには「報連相」と言われる報告・連絡・相談をより一層綿



密に行う必要があります。そのような日常の小さな積み重ねが大きな決断を下す場面で生きてくることとなります。

また昨年甲子園学院将来ビジョン委員会を立ち上げ、学院の将来像について全学的な見地からの検証・検討を行っておりますが、逆に言えばこのような委員会を作らねばならないほど、学院を取り巻く経営環境は切迫し、難しさを増しているとも言えます。更に令和七年度からの私立学校法の大幅な改正など対処しなければならぬ問題は山積しております。また昨年秋季に大学と短大がそれぞれ認証評価を受審いたしました。正式な最終結果は間もなく明らかになるとは思いますが、関係者の努力により適合の評価を得られるのではないかと感触を持っております。しかしたとえ適合でも、それで学生数が増えるわけでも、財政状況が好転するわけでもありません。結果如何に関わらず、やらねばならないことは同じなのです。それは教職員が「和衷協同」の精神で一致団結し、「至誠一貫」の気持ちで学生・生徒・児童・園児らと向き合い、日々の教育に取り組みすることに尽きるのです。その姿勢こそが遠回りのよう

で実は問題解決の一番の近道だということに他なりません。

昨今の厳しい状況下ではどうしても目先の結果を求め、奇抜なアイデアで乗り切ろうと考えるがちですが、そんな特効薬はありません。使い古された言葉ですが、こういう時こそ「初心に還る」ことです。校訓三綱領に象徴される建学の精神に立ち戻ります。しかし教職員一丸で取り組むなどは口で言うほど簡単な話ではありません。それだけに先程申しました「正確な情報の共有」とそのための「報告・連絡・相談」は不可欠の要素なのです。そして今こそ校祖先生が心血を注いで創られ、後を継がれた前学院長先生が昨年百歳を迎えた久米多香子特別顧問と二人三脚で護り続けて来た建学の精神を、私たち全教職員の指針としなければなりません。夜明け前が一番暗く、その先には必ずや希望の光が見えるものと信じます。

不透明不確実な時代であり、私たちが学院の歴史と伝統を守りながら、更に前進する所存でございます。その覚悟をご霊前に改めましてお誓いすると共に、天上の校祖先生並びに前学院長先生、そして物故されし幾多の御霊の一層のご加護とご導きを祈念し謹んで追悼の辞といたします。

令和六年三月三日
甲子園学院長
久米知子

同悲の心 ～人の心に寄り添う～

大本山須磨寺事務長 小池 陽人

大学での就職活動中に、下宿先に母から届いた小包の中に一冊の仏教に関する本があり、その本の中に、現代経営学の父と言われるピーター・ドラッカーの著書についての記述があり、彼は「世界最古のNPOは日本の寺である」と述べていたそうです。たしかに日本最古の寺である四天王寺は、宗教行事だけでなく、教育機関、医療機関、福祉施設等の役割を担い、行政が行き届かないところをすべて寺がカバーしていました。

また、こんなことも述べられていました。「住職」とは本来「十職」と書くものだったそうで、これは「苦しみに寄り添う仕事は、一から十まですべてお坊さんの仕事」という意味でつけられたのだそうです。その本に書かれていたこの二つの言葉に、私は非常に感銘を受け、お坊さんになることを決めました。

お坊さんになってすぐに、修行道場へたいへん厳しい指導を一年間受けることとなりました。この経験の中で学んだことで、皆さんにぜひ伝えたいことがあります。

お釈迦様は、世の中にある様々な苦しみ…これを「四苦八苦」と言いますが、お釈迦様は「この苦

も、「ああこれが普通なんだ」と思えるようになります。これが「一切皆苦」の生き方なんです。ぜひこの考えを普段から口ずさむように実践してください。

皆さんはコロナを経験して、部活が出来ず行事が出来ず学校にいけないで、「なんて自分は不幸だろう」と感じていただろうと思います。ただ、そのおかげで「人生って思い通りにならない」ってことを実感しました。これは大変貴重な経験です。大半の人が、クラブ活動や学校生活を「当たり前」としてしか捉えられなかったことを、皆さんはこれを「当たり前じゃないんだ」ってことにすでに気づかれています。これを忘れないことが大切だと思っています。

今日皆さんに伝えたいことは「自分の弱さを出せる強さ」ということです。皆さんにも私にも「自分はこう見られたい」という思いが必ずあります。でもそこで本来の自分とのバランスが崩れたときに、時として心を病んでしまうこととなります。

「病、市に出せ」という格言があります。「悩み事があつたら表に出しなさい」という意味です。日本人の多くは「人様に迷惑をかけてはいけない」という教育を受けていますが、人に迷惑をかけずに生きるなんて無理で



お釈迦様は、世の中にある様々な苦しみ…これを「四苦八苦」と言いますが、お釈迦様は「この苦

す。そこに気づき、大事なことはやせ我慢しないことです。自分で弱さを出せることが大切です。「自立」という言葉があります。が、本当の意味は誰にも依存しないということではなく、「できるだけ多くの依存する先（サポーター）を増やしていくこと」が本当の自立だそうです。そして最大の自傷行為は「助けを求めないこと」なんです。これから社会に出て行く皆さんには、「誰かに助けを求めることが大事なんだ」ということを是非覚えてほしいと思っています。

今日の演題である「同悲の心」の「同悲」とは、「人の悲しみを自分の悲しみに置き換える」ということですが、これをどうしたらできるかと言えば、「自分の弱さを見せられる」「弱音を吐ける」ということが、実は自分を守ることになるんだということを心に留めておいてください。

「Negative Capability」(ネガティブ・ケイパビリティ)という言葉があります。意味としては、「性急に答えを求めずに、宙ぶらりんの状態であらわれる力」なんです。私は社会に出て行ったときに、この力が一番大事だと思っています。

人の悩みを聞いたとき、解決してあげたいと思いが強く解決できないうちが、できないことが多いです。その時に大事なことは、相手の悩みを聞き相槌をうち、同じ

ように悩み苦しむ。それが「同悲の心」なんです。ぜひ人と向き合うときは、自分が弱さを打ち明け、人の悩みを聞いてあげられる人になつてほしいです。

最後に私が四国遍路の修行をしたときの、忘れられない人との出会いのお話をします。

大雨で雨宿りするために休憩所に入ると、そこに先に寝転がっている人がいました。その人はバイクに乗ってただ放浪し続けている人でした。



その人との別れ際に言ってくれた「兄ちゃん、生きてるだけで十分や。シンプルやろ?」この言葉が心に響き、今でも私はこの言葉をお守りにしています。

今を生きている老若男女はいろんなプレッシャーに苛まれていますが、「お前は社会の役に立っているか?」「生産性はあるか?」それだけで人間の価値を見定めようとする世の中になっていきます。生きていくだけで十分なんです。生きていくだけで価値があります。自分の価値を自分で決めていく。自分の価値を人に委ねない。あなたたちの価値はご先祖様が必ず認めてくれる。だから自分の命を大事に生きていってください。

豆まきタイム

異年齢交流

今年度の九月から、どんぐりタイムの活動が再び始まりました。満三歳・年少・年中・年長の子どもたちが、異年齢のグループに分かれ、「学年を越えてたくさんの友だちと遊びながら親しみがもてるように」とのねらいで、月二回程度実施しています。

最初は緊張や恥ずかしさからお兄さんやお姉さんが遊ぶ様子を見ていた子どもたちも、回数を重ねる毎に、「今日は、何するの?」とワクワクしながら参加するようになり「だるまさんがころんだ」「ロンドン橋おちた」「ジャンケン列車」など伝承遊びや触れ合い遊びをみんなで楽しめました。「一緒にロンドン橋をつくらう!」と年長児が遊びを教えたり手をつないだりして優しく寄り添ってくれるので、グループの子どもたちは、みんな仲良しになれます。



みんなで遊ぶと心も体もほらか!これからもいろんな友だちと遊ぶ楽しさが味わえる内容を計画していきます。

豆まき

二月一日



幼稚園で「豆まき」をしました。久しぶりにボランティアのお父様方に、「鬼」をお願いしました。子どもたちは節分の日が近くと「先生、もうすぐ幼稚園に鬼が来るんだね」「でも、大丈夫!豆をいっぱい用意しているから、みんなでやつつけようね」「鬼、怖いなあ!」などと、節分の日が近づくと鬼の話が増えてきました。

さあ、いよいよ豆まきの始まり!泣きだす満三歳児や年少児、「怖くない、怖くない」と自分に言い聞かせながら、緊張した表情

卒園記念遠足

年長組

二月二十二日、年長組が電車に乗って、キッズプラザ大阪へ卒園記念遠足に行きました。



施設内では、友だち同士誘い合... 思い、存分、楽し、む姿が見られました。子どもたちの人気No.1コーナーは階を跨いでそびえ立つ『ごとの街』でした。中心に塔

で豆をまく年中児、「任せとけ!」と言わんばかりの表情で勇敢に豆をまく年長児。子どもたちの心模様は様々ですが、怖さを隠して、



「鬼は外福は内」の元気の良い声と、豆をまく姿に、鬼は退散。みんなの心の鬼もやつつけられたことでしょう。「鬼」になってくれたお父様方、有難うございました。春と共にみんなにたくさんの幸せが届きますように!

がそびえ立ち、そこから迷路のような通路が広がっています。「あ!行き止まりだ」と今来た道をUターンしたり、壁に付いて

吊り橋を怖々渡ってみたり、チューブスライダを滑ったりするなど、思い切り体を動かして遊びました。

「人が入れるシャボン玉」では、大きなシャボン玉に体をすっぽり包まれ、少し緊張した表情の子どもたちでしたが、終わると「ふわふわして空を飛んでいる感じがするよ」と友だちに勧めている姿がとても印象的でした。

生活発表会

二月十七日

各学年の保育のまとめとして「生活発表会」を、ホールで行いました。今年度は満三歳児も加わり、四学年がそれぞれお気に入りのお話を劇にすることを楽しみ、自分のもてる力を発揮しました。



演じるのが初めての満三歳児と年少児はたくさんのお客さんにドキドキしながら、カラフルな衣装を着て、友だちと一緒に声を合わせて台詞を言ったり、歌をうたったり、小さな体で元気いっぱい表現する姿に、温かい拍手を沢山いただきました。



年中児は絵本を繰り返し読み、内容やそれぞれの役の気持ち、物語の展開を楽しみながら練習に取り組みました。本番も同じ役の友だちと気持ちを合わせ、臨む姿が見られました。幼稚園生活最後の発表となる年

長児は長いお話を題材に選び、クラス皆で内容を読み深め、何度も話し合いの時間を設け、劇をつくり上げていきます。当日は登場人物それぞれの心情を汲み取り、役の特徴を捉えた動きや台詞を発表し、堂々とした姿を見られました。その姿に思わず涙を浮かべる保護者の方々も見られました。同じ目的に向かって友だちと気持ちを合わせて、日々取り組んだ成果を大勢のお客さんの前で発表した経験は、大きな自信につながりました。

つぶやき Pick up すくすく大きくなあれ

■ 今年は辰年なので、辰を題材に絵をかくことにしました。降園時に子どもに「今日は何をかいたかな?」と尋ねると「トナカイ!」えっ?「今年は何年?」「辰年!」覚えていてくれたのですが、角がトナカイに似ていたのかな?

■ 三学期になって劇ごっこが始まりました。こぶたの家を作って遊んでいたのが、教師がオオカミになってその家に入ろうとしたら「この家は絶対にこわれぬ!」「じゃあ煙突から入ろう!」「この家には煙突がないから!」無理に積み木をまたいで入ろうとしたら「このピザ食べていいよ」とニコニコ。途中でお話が変わりました。が、可愛い一コマでした。

修学旅行

2月13日~16日

二月十三日から十六日まで、中学受験を終えた六年生が、沖縄へ修学旅行に行きました。

初日、期待に胸を弾ませる一行は伊丹空港から沖縄へ。到着後、「ひめゆり平和祈念資料館」と「平和祈念公園」を見学し、

戦争の悲惨さを知り、平和の大切さについて学習しました。昼食は沖縄そばをいただきました。

二日目は、「もとぶ元氣村」での海洋体験プログラム。

沖繩の美しい海でカヌーやサバニの体験をしまし。ヒトデやナマコなど海の生き



物にも触れ、海の神秘や楽しさを感じました。

三日目は、「美ら海水族館」で迫

力ある大水槽に魅了された後、「おきなわワールド」へ行きました。「玉泉洞」では、自然



が作り出した芸術ともいえる鍾乳洞に圧倒されました。また、伝統工芸紅型や琉球ガラスの体験をし、本場の素晴らしいエイサー舞踊を鑑賞しました。

最終日は、「首里城公園」をま

すばらしい先輩たち



高田 大輔
第五十五期生
京都大学卒
(株)リクルート

私は幼稚園と小学校の九年間を甲子園学院でお世話になりました。現在は日本中で多くの人々に利用されるITサービスを開発するエンジニアとして働いています。小学校時代の忘れられない思い出の一つに、放課後遅くまで勉強

していた日々があります。家での学習が苦手だった私は、学校で遅くまで勉強したいと無理を承知でお願いしました。先生方は私の自分勝手なお願いを快く受け入れてくださっただけでなく、勉強中に

出た疑問を一緒に解決してくれたり、帰りは最寄りのバス停まで送っていただいたりと、優しく見守ってくれました。あの時の思い出は今でも鮮明に覚えており、感謝の気持ちでいっぱいです。そして、そのときに培った「目の前

のことに全力で取り組む姿勢」は今でも私の人生の中で大きな役割を果たしています。変化の激しい今の時代は先を見通すことが難しく、将来何を目標すか迷うこともあるかもしれませ

ん。そんな時代だからこそ、今の自分は何ができるかという観点から、目の前のことに全力で取り組むことが大切だと私は考えます。甲子園学院はその姿勢を全力でサポートしてくれる場所でした。私がそうであったように、小学

校外学習

二年生は、キャリア教育の一環として「キッザニア甲子園」で職業体験を行いました。三年



生は、「伊丹市立伊丹ミュージアム」に行き、美術や工芸、俳諧等の歴史や文化を学びまし

た。四年生は、「阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター」へ行き、防災の知識と今後起こりうる災害への備えを学びました。子どもたちは、日々の授業では経験できない体験や知識を得て、社会への関心を高め視野が広がりました。

学習発表会Ⅱ(展示発表)

二月二十四日

今年度最後の授業参観と合わせて、「学習発表会Ⅱ(展示発表の部)」を開催しました。



図工の授業で制作した作品を展示しました。親子で作品を見ながら「この作品はこんな工夫をしたんだよ」などと自分の作品を解説する子ども様子も見られました。

クラブ作品展



習字クラブ展は、久米翠娥先生のご指導を受けた子どもたちの力作が揃い、一つひとつの作品を見ながら感心する声がかげられました。生活クラブ展では、手作り布カレンダールを展示しました。カラフルで可愛らしい作品が見る人の目を惹き寄せました。

校時代の経験は皆さんの人生の礎を築く重要な要素となるでしょう。日々を大切に、素晴らしい小学校生活を過ごしてください。皆さんのより良い未来を願っております。

令和5年度中学入試 合格・進学者数(男子14名、女子0名)

学校名	合格者数	進学者数	学校名	合格者数	進学者数
愛光	3	0	帝塚山	1	0
大阪桐蔭	1	1	東大寺学園	2	0
岡山	4	0	灘	2	2
海陽	2	0	西大和学園	2	0
片山学園	1	0	白陵	1	0
関西学院	1	1	雲雀丘学園	1	0
甲南	1	1	北嶺	2	0
夙川	1	1	明星	3	1
高槻	1	0	六甲学院	5	4
滝川	5	2	(国)大阪教育大学附属池田	1	1

私立中学入試報告

一月十三日から近畿圏の私立中学入試が実施されました。体力も気力も求められる短期集中型でしたが、日頃から元氣いっぱい六年生たちは、力を出して乗り切ることができました。



1/2成人式

一月二十三日

四年生が、自分の将来についての決意を發表し、今頑張っていることや得意技なども披露しました。将来について真剣に考える機会となり、これから自分の目標に向かって頑張ろうという気持ちを持つことができました。

吹奏楽部
定期演奏会
十二月十九日

あましんアルカイックホールにて、本校吹奏楽部の第十五回定期演奏会を開催しました。この演奏会をもって高校三年生の生徒たちは最後の舞台になるため、全員で気持ちを引き締め、心を一つにして本番に臨みました。

第一部は、冒頭からティンパニの打音による迫力たつぷりな響きで曲が始まり、軽快な二拍子と煌びやかなサウンドとともに「キャンデイド序曲」で幕を開けました。続いて二曲目は、世界的に活躍中の日本を代表するトロンボーン奏者の中川英二郎氏を特別ゲストにお招きし、B・アッペルモント作曲のトロンボーン協奏曲「カラーズ」を演奏しました。会場を一瞬にして釘付けにする音色と技術に魅了された後、アンコールではNHK連続テレビ小説「瞳」のメインテーマを部員とのデュエットにより披露しました。一部の最後は、「組曲「惑星」より木星」を演奏し、会場から盛大な拍手をいただきました。



第二部は、KGB劇場「Magic of Disney music〜KGBランドへようこそ〜」と銘打ち、企画から演出、パフォーマンズに至るまで、全て生徒たちが担う音楽劇を執演しました。自分たちで考えたオリジナルの劇を楽しく観ていただきながら、ディズニーの心躍る音楽を、吹奏楽部全員により演奏いたしました。

最後は高校三年生の引退セレモニーです。次の新体制である一、二年生による「糸」の演奏をバックに、三年生全員で涙をこらえながら合唱をし、吹奏楽部部長が三年間の様々な思い出や、これまで支えてくださった方々への感謝の言葉を述べました。自信に満ち退場していく先輩たちの後ろ姿を目に焼き付けながら、一、二年生は感謝と新たな誓いをもって演奏し、満場の拍手の中、終演しました。

地域の中学生と一緒に
Sunday Wind Project (SWP)

今年度より吹奏楽部では、毎月の何れかの日曜日に「Sunday Wind Project」と呼ぶ取り組みを実施しています。この「SWP(略)」とは、部活動の地域移行などから吹奏楽の活動が縮小されていくなかで正しい奏法や練習方法を学び、よ効率の良い練習・活動を広げていこうという試みです。

プロジェクトの内容は、各楽器のスペシャリストによるパート別講習会と吹奏楽部員との合同基礎合奏の二部制になっています。パート別講習会では、フルート・トロンボーン・パーカッションをはじめとする八つの管打楽器と、夏には吹奏楽コンクールに向けての課題曲講習や基礎合奏講習を行いました。

合同基礎合奏では、一時間程度、部員と一緒にバンドの基本となる音階やリズム、ハーモニーなどの基礎合奏に取り組みました。講習会や合同基礎合奏に参加した中学生からは、「大事な基礎を丁寧に教えていただいた」「高校生と隣で吹くことで新たな発見があった」などと言った声が多くありました。



ピッコわくわくステージ
中学生

音楽を通して芸術の秋を体感した「わくわくオーケストラ教室」に続いて、十二月一日、尼崎のピッコロシアターで行われている「ピッコわくわくステージ」に参加し、演劇を鑑賞する機会を持ちました。この活動も兵庫県下の多く

生徒会活動

新型コロナウイルス感染症の影響も緩和された今年度は生徒会活動においても従来に近い活動が戻ってきました。

新年度初めての行事は在校生と新入生の対面式でした。緊張する新入生を生徒会主導のもと、学校に迎え入れ新しい学校生活がスタートしました。部活動紹介では司会として、



の中学校が参加し、本格的な舞台芸術にふれることができる貴重な体験活動になっています。

今年度は「森のなかの海賊船〜こそあの森の物語〜」という物語でした。生徒たちは役者さんたちの演技や息づかいはもちろん、たくさんの歌や音楽を五感で感じながら劇の世界に引き込まれていきました。終演後、作品や大道具、照明、音響など舞台づくりの裏側についてもわかりやすい解説がありました。舞台をより身近に感じることができました。芸術を通して、生徒たちがさらに豊かな心を育てていくことを期待します。

新入生に様々な部活動の魅力アピールしました。また、体育大会での司会進行や実況、コーラスコンクールの司会進行、文化祭においては校内放送やビンゴ大会では、生徒会役員として尽力しました。さらに、一月一日の能登半島地震に対し、一刻も早い復興を願って募金活動を生徒会でも行い、生徒や教職員へ呼びかけました。活動を通して様々な経験を積み、役員一人一人が成長することができました。

以下、新旧生徒会長からの言葉です。旧生徒会長長岡田風花さんは「今年度は新型コロナウイルスによる制限が緩和され、体育大会、コーラスコンクール、文化祭などの行事が通常に近い状態で進行することができ、とてもうれしく思っています。来年度は、新生徒会役員とともに学校を盛り上げ、楽しい学校生活になるよう頑張ってください。」と次年度の役員にエールを送り、それを受けて新生徒会長福井希佳さんは「来年度は行事も例年通りに行われるので、クラスだけでなく、学年、学校全体で協力し、全員で学校生活を盛り上げていきたいです。」と決意を新たにしています。



お別れ会 高校三年

二月二十六日、講堂にて高校三年生最後の学年行事である、お別れ会を実施しました。ホームルームの時間を使い、各クラスで出し物の内容を考え、クラス代表者を招集して話し合いをするなどして、準備を重ねてきました。当日は五つのチームに分かれ、ジェスチャーゲーム、など、フラフープリレーのゲームをして競い合いました。景品を懸けて白熱した勝負が繰り広げられるなど、盛り上がりのあるお別れ会となりました。

ジェスチャーゲームでは、紙に書かれたお題を身振り手振りで見せ、二十問を正解するまでのタイムを競いました。お題の用紙は各クラスの担当がめぐり、生徒と息の合った動きが求められ、お題をいかにわかりやすく表現するかなど、様々な力が試されました。



なぜかでは、十問ずつの出題で二回戦まで行いました。各チームで制限時間内に答えを紙に書いてもらいました。チーム一丸となり協力することで、正解に辿り着くチームもあれば、時間いっぱいまで悩み続けるチームもありました。最後のフラフープリレーでは、各チームで手を繋ぎ、離すことなく最初の人から最後の人までフラフープをいかに早く渡すことができるかのタイムを競いました。チームごとに試行錯誤し、最大限体を動かすなど、熱い戦いが繰り広げられました。最後は三つのゲームの総得点を

発表し、景品の授与が行われました。マグカップや文房具、お菓子の詰め合わせなどをもら



い、生徒たちは非常に喜んでいました。ゲームの後には、食堂にて昼食会を行いました。慣れ親しんだ食堂で、高校生活を共にした友だちとお弁当を囲みながら、楽しいひと時を過ごしました。短い時間ではありましたが、とても有意義な時間となりました。

兵庫県警察本部長賞 二年連続受賞

二月十六日、兵庫県警察本部の「高校生自転車交通事故防止アクションプログラム」で全校生徒が五カ月間無事故・無違反を達成、また交通安全テストでも好成績だったとして、甲子園学院高等学校が二年連続で最高の兵庫県警察本部長賞を受賞しました。高校では全校生徒の半数超が自転車通学しています。毎年四月に、西宮署員を講師に迎え、自転車交通安全講習会を実施しているほか、スマートフォンを持つなどの「ながら運転」をしないように日頃から指導しています。



短大連携発表会

二月六日

高校三年生の五年一貫幼児教育コース五名は一年次より甲子園短期大学との連携授業を受けてきました。また、総合選択コースでは総合演習に短大連携の選択講座があり八名の生徒が受講しました。五年一貫幼児教育コースの生徒は三年間の、総合選択コースの生徒は今年の授業を振り返る発表を行いました。短大でパワーポイントの作成について教わり、高校のパソコン教室で作成し、短大の先生方の前でプレゼンテーションを行いました。皆とても緊張していましたが、授業を振り返りながら学んだことを発表しました。

総合選択コースでは



「コンセンサスゲーム」「挨拶とマナー」「フードデザインサイエンス」「創作について」「音楽を楽しむ方法」「園芸デザイン」「絵本deキヤリア」などの授業を振り返りました。「挨拶とマナー」では第一印象やお辞儀の仕方、スマイル効果について話し、今後生きていくうえでとても大事なことを学んだ、今後の生活にいかしていきたいと発表

しました。「コンセンサスゲーム」では一人でも考えた意見より、みんなで考えた意見の方が間違いが少なかったと発表し、みんなで意見を出し合うことの大切さを学びました。五年一貫幼児教育コースの生徒たちは学年ごとの発表をしました。一年次は「お芋ほり」「手袋シアター」「テーブルコーディネート」「ネット」など、二年次では季節の行事制の「エブ



ロンシアター」「保育実習」など、三年次では「応急手当」「ペープサート」「ピアノ」などです。最後に絵本作りは三年間制作をし、それぞれ工夫した点を発表しました。「子どもとの接し方・読み聞かせのしかた・演じ方・弾き歌いなど短大との連携授業があったからこそ保育の知識を増やすことができた」また、絵本作りについては「毎年同じ作業をすることによって自分の成長を感じることもできた」と結びました。高校では学ぶことのできない体験や経験を短大で学び、今後の進路にいかしてくれるものと思います。

第76期生 入試合格状況

(令和6年3月4日現在)

甲子園大学	3名	京都女子大学	1名
近畿大学	2名	追手門学院大学	1名
龍谷大学	1名	神戸学院大学	2名
佛教大学	1名	京都外国語大学	1名
甲南女子大学	3名	関西外国語大学	1名
京都橋大学	1名	神戸女子大学	1名
天理大学	1名	大阪音楽大学	3名
神戸親和大学	1名	大阪芸術大学	1名
関西看護医療大学	1名	他四年制大学	17名
甲子園短期大学	12名	他短期大学・専門学校	18名

令和五年度 学内成人式

一月十二日、学内成人式が四年ぶりに学院講堂に於いて開催されました。

第一部の記念式典では、早坂三郎学長からの式辞に応えて、II回生の代表学生が誓いの言葉を述べると、学生たちは成人としての責任に身を引き締め、熱心に聴き入っていました。続いて学院からの記念品贈呈が行われました。

第二部では、現役保育士でもある「あそびうたユニット かば☆うま」さんをお迎えし、『社会に出る前に仲間を感じてほしい』と題した講演をお聞きしました。とても楽しい歌とトークが繰り広げ

られた講演で、時には体を使った「あそびうた」も加わり、会場は大いに盛り上がりまし



ちは、今、隣にいる仲間をしっかりと感じ、将来の職場やこれからの人生で出会う「仲間」や人々にも思いをはせる、とても貴重な経験になったことでしょう。※民法の一部を改正する法律が、令和四年四月一日から施行され、成年年齢が十八歳に変わりました。短大では引き続き「二十歳」を人生の節目としてお祝いします。

公開講座 開催

令和五年十二月九日、大学と短大教育研究センターが共催して大・短大の客員教授である土井善晴先生の公開講座を開催しました。キャリアアップ研修会の参加者や地域の一般参加者、短大生、オンラインで繋がった甲子園大学の学生等、多数の聴講がありました。

「人生一〇〇年時代の食生活と料理」幼児から高齢者まで」をテーマに、日本料理の魅力と料理することの重要性について、料理の写真に加えて土井先生お得意の笑いのエツ



「人生一〇〇年時代の食生活と料理」幼児から高齢者まで」をテーマに、日本料理の魅力と料理することの重要性について、料理の写真に加えて土井先生お得意の笑いのエツ

大王松を素材に クリスマスツリーを制作

幼児教育保育学科II回生が履修する「保育内容総論」では、子どもの園生活全体を視野に入れて総合的に指導をする「幼児教育における指導の考え方」を学んで



ています。十一月二十九日と十二月三日の授業では、子どもがクリスマスという異なる文化に触れる活動に親しみ、様々な物を用いて、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを楽しむための指導法を考える、ということを目指に設定し、大王松を素材としたクリスマスツリー制作を行いました。



学生たちは制作を通して、子どもの主体性と想像力を育むためには、多様な素材や道具を準備し、自由に制作活動が行える環境の計画と準備の必要性を学びました。完成後は、みんなでツリーを飾って楽しみなが鑑賞し、一足早いクリスマス気分を味わいました。今後も学んだことを活かし、保育の現場で子どもの主体性と想像力を育む指導を行ってこれることを期待しています。

卒業研究発表会

一月三十一日、令和五年度卒業研究履修生による発表会が行われました。この日に向けて、指導教員とともに前期から研究や練習を重ねてきました。本年度は学習成果が一発表、論文部門三発表、実技部門のピアノ演奏二発表、制作部門二発表の計八つでした。

学習成果では「逢えてよかったね」「ドレミの歌」など計三曲の合唱曲が披露さ



れました。論文部門では、日本舞踊についての解析、点字の歴史、宝塚歌劇団とジェンダーについてなど、多岐にわたる内容でした。実技部門のピアノ演奏は、グリーグ作曲「小人の行進」、ベートーヴェン作曲「悲愴」といった難曲に挑戦しました。制作部門ではスケッチブックを使ったシアターの発表と作品の展示が行われました。いずれもすばらしい発表で、大きな拍手に包まれました。



おせち料理を楽しむ会

十二月十四日、介護福祉フィロドII回生が短大教職員を招いて恒例の「おせち料理を楽しむ会」を開催しました。白みそ仕立てのお雑煮、黒豆、ごまめ、栗きんとん、伊達巻、紅白かまぼこ、えびの黄金焼などを手作りし、一足早いお正月を味わいました。



季節行事は、介護が必要な利用者の心身を活性化し、生活に潤いを与える余暇活動として介護施設でも必要とされています。

短期大学基準協会 認証評価を受審

短大は、令和五年度的一般財団法人大学・短期大学基準協会による認証評価を受審しました。国公立すべての大学は七年以内に一回、文部科学大臣の認証を受けた認証評価機関による第三者評価を受けなければならないとされています。今回の報告書は内部質保証の取組みが中心で、特に学習成果の可視化が可能な教務システムの導入および活用等について力を入れ記述しました。十月の訪問調査ではこの教務システムについて多くの質問があり、関心の高さがうかがえました。受審の結果は三月末に正式な認定通知があります。

土井善晴先生

土井善晴先生の公開講座は大学へオンラインで配信され、栄養学部栄養学科と食創造学科の学生が受講しました。

学生からは「日本の料理や食事の文化の奥深さを改めて知ることができた」「管理栄養士として、ただ食事を楽しむだけでなく、こういった日本食の特徴を生かして家族や様々な人とのコミュニケーションの場を作る事も大切であり、実践したいと思った」「管理栄養士は様々な嗜好、ニーズを持った人々に料理を提供するプロである。栄養学

和食シンポジウムで学長が講演

一月二十七日、伏木亭学長が文化庁主催の「和食ユネスコ無形文化遺産登録一〇周年記念シンポジウム」に登壇し、基調講演を行いました。伏木学長は「ユネスコ無形文化遺産登録一〇周年がもたらす和食の未来」と題し、「和食は昔、伝統に固執する姿勢がその衰退を招いていたが、京都の料理人や研究者たちが変革を起こし、新しい手法や意識を打ち出した。その結果、ユネスコの無形文化遺産への登録や科学誌『ネイチャー』への和食紹介記事の掲載など、見事な復活を果たすことができた。また、十年前に新たな試みとして



の観点からのみ栄養指導をするのではなく、嗜好、料理の見た目なども意識し、人生一〇〇年間の食事を豊かにする管理栄養士になりたい」「毎日の食事は食べる人の人間性に大きい影響を与えたいと思う。そこに栄養教育や指導などという形でかかわる管理栄養士としても意味のある職業だと改めて思った」等の感想があり、有意義な講座となりました。

外国の若手料理人を招き、日本料理を学んでもらったことが大変好評で、今でも新たに学ぶ機会を求められるようになってい。和食は広がり続け、伝統を守るために日々革新を続けている」と講演されました。イベントには、京都の名店「菊乃井」主人の村田吉弘氏や、料理研究家の大原千鶴氏なども登壇されており、会場は満席の大盛況でした。

学生による特許出願

十一月二十七日、栄養学部フードデザイン学科四年生片岡優紀さんが特許を出願しました。今回特許出願したのは片岡さんが開発し

アスリート奨励金を獲得

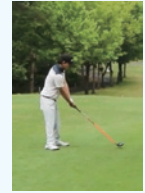
心理学部二回生の寶門洸大さんが「サントリーチャレンジド・スポーツアスリート奨励金」に選ばれました。この奨励金は、サントリーホールディングス株式会社が主催し、地域におけるパラスポーツの普及拡大・環境整備を目的として、未来を担う若手アスリートに奨励金を給付する事業です。寶門さんは今年度の日本障害者オープンゴルフ選手権に出場するな

た「カヌレ」で、本学初の学生による特許出願です。このカヌレは小麦、卵、牛乳成分を使っておらず、アレルギー体質の方でも安心して美味しく食べられます。



片岡さんによると「開発の過程で苦労したことは、各材料の使用量の調整です。一昨年の五月から開発を始めたのですが、なかなかうまくいかず、安定したカヌレの形になるまでかなりの時間を費やしました。失敗したら材料の調整を行って試作するということの繰り返しでした。形が安定しなかつたり、オリジナルのカヌレとは程遠い出来だつたりするなど、米粉のクセがかなり強かったためその開発が一番苦労しました」とのことでした。

ど大活躍しています。「障害者ゴルフはまだまだマイナーなスポーツであり、支援や普及が十分ではない状況にあります。そんな中、このような支援の場を提供していただき、とても感謝しております。日本オープン優勝やUSオープン出場を目標にさらなる成長を目指していきたいと思えます。」と寶門さんは将来の夢を力強く語ってくれました。



国際会議で優秀論文賞受賞 樋口勝一心理学部教授

本学の共通教育推進センター長の樋口勝一教授が、十二月十一日（十三日）に、インドネシア・バリダイナステイリゾートで開催された高度応用情報科学に関する国際学会にて研究発表（タイトル：Changes in students' motivation to study and their predictions）を行いました。



「やる気度」の時間変化に対する原子の放射性崩壊近似的妥当性と減衰関数の予測式の有効性の検証）について事前に提出された論文が査読において高得点を獲得

日本高等教育評価機構 大学機関別認証評価を受審

大学は、令和五年度に公益財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価を受審しました。同認証評価は、本学の教育研究活動が、評価機構が定める全評価基準を満たし、内部質保証が機能しているか等について審査されるものです。本学が作成した自己点検・評価書と資料編に関し、七月から十二月にかけて書面および実地調査が行われました。

教育課程・学生支援をはじめ、施設や大学経営全般について多くの質問を受ける一方、危機管理マニユアルの整備とIPEの取組みは高く評価されました。評価結果は、三月中旬以降に公表予定です。

認証評価とは

平成十七年度から、全ての大学、短期大学、高等専門学校は七年以内、ここに文部科学大臣が認証する評価機関の評価を受けることが法律で義務付けられました。これを認証評価制度といいます。

認証評価を行う目的は、大学等の教育研究活動の質の向上と改善を支援することで、大学等の内部質保証機能が充実・発展することにあります。

得し、優秀論文賞（Outstanding Paper Award）を科研費研究代表として受賞しました。

おめでとーうございます

伏木亨甲子園大学長 京都市芸術振興賞を受賞

二月六日、本年度の「京都市芸術振興賞」の受賞者の発表があり、学術（食文化）に対する功績により、伏木亨甲子園大学長が選ばれました。この賞は、京都市内で文化芸術活動を行い、新人の育成又は芸術の活動環境の向上に多大な功労があった方々に授与し、その功績をたたえるものです。

今回は、油脂やだしのおいしさに関するメカニズムの解明や、おいしさの客観的評価手法の開発研究に力を注ぐとともに、京都をつなぐ無形文化遺産「京の食文化」大切にしたい心、受け継ぎたい知

恵と味」の選定、また、京都の食文化の継承に貢献してきたことや、「和食・日本人の伝統的な食文化」のユネスコ無形文化遺産への登録にも尽力し、日本人の伝統的な食文化である「和食」の普及や次世代への継承のため、シンポジウムや講演会にも精力的に取り組んでいることなどが評価されたものです。



能登半島地震の被災地へ義援金を寄付

令和六年一月一日に発生した能登半島地震により、犠牲となられた方々にお悔やみを申し上げるとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

学校法人甲子園学院では、被災地での復旧、復興支援などに役立てていただくために、各学校園（大学・大学院、短期大学、中学校・高等学校、小学校、幼稚園）の学生・生徒・児童・園児・保護者の皆様、および本学院教職員有志から集まった義援金を合わせ、

総額一、一九一、三二七円を、石川県に寄付いたしました。

この義援金は、「令和六年能登半島地震災害義援金」として、石川県災害義援金配分委員

会に送金され、被災地の方々の生活支援に役立てられます。一日も早い復旧、復興を心よりお祈り申



学院生の活躍

（○数字は開催月）

中学校バレー部

- ①令和五年度西宮市中学校バレーボール選抜大会 **優勝**
 - ①令和五年度阪神中学校バレーボール選抜大会 **優勝**
 - ①令和五年度兵庫県中学校バレーボール優勝大会 **5位**
- （三月二十七日・八日に行われる近畿中学校選抜大会出場権獲得）

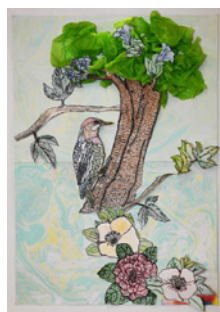


キャプテンの松井優（中二）さんは、「バレーボールができることに感謝し全員バレーをモットーに、全中三年連続出場をめざし、毎日の練習を大事にして頑張ります。」と決意を語ってくれました。

キャプテンの松井優（中二）さんは、「バレーボールができることに感謝し全員バレーをモットーに、全中三年連続出場をめざし、毎日の練習を大事にして頑張ります。」と決意を語ってくれました。

私学総連合美術展

一月二十六日から二十八日まで、兵庫県民会館アートギャラリーで兵庫県私学総連合会主催の第六十二回私学連合美術展が開催されました。本学院からは、小学校の部で濱田和翔（五年）さんの作品が優秀賞に選ばれました。



「緑の中で見つけたよ！
『夢のキツツキ』 濱田 和翔



「たけうまにのれるようになったよ」
荒木 伊代



「ようちえんバスにのって遠足」
中垣 慧吾

園の輪 そののわ No.186

令和6年3月18日発行

学校法人 甲子園学院
〒663-8107 西宮市瓦林町4番25号
TEL. 0798(67)2100
FAX. 0798(67)5488
http://www.koshien.ac.jp/honbu/

あとがき

◆今年度の最終号です。概ね昨年十一月下旬以降の教育活動を掲載しました。
◆卒業・進級おめでとうございませう。目標を持って新たな一歩を踏みだしてください。